

〔特別寄稿〕

シネラリア

北澤義弘

イギリス文化の源流の一つと考えるケルト人の足跡を辿る旅から帰ってからもう一年が経った。時の逝くのは瞬く間である。

一人の人間の生活の体験は叢雲の合間々々に見え隠れする月影の如く生涯にわたり時々姿を現しやがて人生の個性的体得を形成する。私がシネラリアに係った中学生時代とかそれとの因縁を持った我が出生時から数えるとそれはもう半世紀以上になろうとしている。これも省みれば同じく瞬く間のことに思はれる。まことに徒然草七

段の章がただ今のわが心境である。「かげろふの夕を待ち、夏の蟬の春秋をしらぬもあるぞかし。つくぐと一年をくらすほどだにも、こよなうのどけしや。飽かず、惜しと思はば、千年を過すとも、一夜の夢の心ちこそせめ。」蜉蝣の半日の生命と人の數十年の寿命は当事者から見れば同じ長さであるとしみじく思う。人類の歴史の上からはこれはさ程昔の人の感慨でもあるまい。この徒然草の引用をするために中学の時使った岩波文庫の教科

書版を書棚から探してきた。これは四六版で普通の文庫本より一廻り大きい。熱心な国語教師が今思えば大学並みの内容豊かな授業をこの版を用いてして下さったことが本の餘白に残る鉛筆の書き込みからまざまざと思ひだされる。この授業の感銘から人生の無常を感じ佛教典や高僧伝を読み耽り、よく鎌倉の佛寺をめぐり歩いたものである。

昭和十一年から三、四年の内に世界の風雲はとみに險悪になつて行つたが学校はまだ校長はじめ教師の中に大正デモクラシーの自由の氣が残つていて、軍事に拘らない限りは或る意味で現在よりも言論に自由が温存されていた。例えば津田左右吉著の「我が国民思想の研究」の如き今から思えば極めて大胆率直でリベラルな文学評論が人氣を保つていた。むしろ戦後は表現の自由を謳つているのにうっかりもの言えは魔女裁判と言うリンチに遭う危険がある。

ともあれ学校や家の中は自由で楽しかった。放課後は

好きな運動や博物の自由研究が先生も交えて充分エンジョイできた。丘浅次郎著のぶ厚い「進化論講話」や「ファール昆虫記」などは一氣に読み切り今だに何かが頭に残っている。あの時期の子供の好奇心は存分に満させるべきだとしみじみ思う。知識を攝取する馬力は自分でも驚くばかりであった。それにつけても小学、中学に子供を啓発する人格学識兼備のよい先生は不可欠と思う。

戦争前の中学の教科に作業と言うのがあった。それは今で言う園芸である。この先生が東北辯丸出しの好人物であったので生徒に「バイスケ」と綽名されながらも心底では慕はれていた。子供はよく人を見抜くものだ。バイスケとはバスケットの訛で竹製の丸い平籠のことである。これで土や砂利を運んで花畑を造るのでその名を借用したのである。こゝでは今も役立っている農作業の技術が身についた。天気の良い日はリヤカーで近くの鳥森から落葉を集めては何度か運び、裏の堆肥小屋に入れて花床用の肥料を醸成した。

これを作るのが一番大変な仕事だ。コンクリートの堆肥槽に運んで来た落葉を入れ、厩肥、糞、土、生草、乾草、米糠などを幾層にも四、五寸づつ積み重ねるがその間に人糞尿をかけるのである。これも学校の便所から肥担桶と柄杓をもって汲んで来のだ。生徒は大方東京横浜の勤人や軍人の子弟だからそんなこと見たこともまして

やったこともない。便所裏手の汲取口の蓋を取る所までは誰にもできた。さて大便壺に肥柄杓こいじくを入れられる生徒はいない。互ひに「お前やれ、お前やれ。」と譲り合っている。常にはリーダーシップをとる奴に限って後に廻り、人のいゝのかおとなしい生徒が汲取口の前面に押しやられる。その次の位置にはやる気もあり好奇心の強いのが取りまくが柄杓を糞溜めに突っ込む勇氣にもう一つ欠けている。どうしようこうしようと小田原評定が汲取口毎に始り騒々しい。これは小ずらい大人社会の縮図そのものだ。その時高座郡あたりの農家の息子がつかと前に出て来ていきなり便槽に肥柄杓をぐいと突っ込んでぐりぐり中を掻き廻した。「こうするんだよ。」と平然たるもの。一瞬あつけにとられて彼を見る。やがて一帯に特有の臭気が漂い皆の鼻がそれに馴染む頃銘々が自分の柄杓を恐る恐る中に入れる。こつこつと柄から実物の手応えを感じるうちに慣れて来て肥担桶は一ぱい近く満たされる。「そんなに入れるな。半分にしないと天秤で担ぐときゆれて撥ねるぞ。」この時の農家の息子の何と凛々しく見えたことか。

十七、八世紀の大江戸の市政は徳川幕府爲政者の知慧で同時代の世界に類のない町造りに成功した。あの時代江戸程の大都市に清潔が保たれたのは町の尿尿の合理的處理のお蔭である。江戸周辺を野菜類の供給地としその

下肥を江戸の市中から集めさせたのは一石二鳥の名案であった。近代化してゆく社会の中の教育にこのような教科があったことは私の人間形成の中でも大いに肥になったと今にして思はれる。

乾いた落葉や藁の層を積みあげる間に薄めた尿尿を撤く。馬糞も混ぜると更に効き目が出る。この作業を四月頃にする。と九月の二学期には早速利用できる程に熟成しているのである。生徒に最も嫌われるこの作業が終り夏休みに入る頃から温室の冬と春を賑はせる秋播きの花の種が苗床にまかれる。園芸の花弁の知識がなかった私達は西洋の種々な草花の名を教はった。どんな美しい花が咲くのか知らないがその時覚えたのは先ずプリムラ、シネリヤ、カルセオラリヤ、パンジーなどの名であった。

中学一年ではあまり政治や国際問題のことは分らなかったがその春にはロンドン軍縮會議脱退や二・二六事件があり、また翌年に蘆溝橋の日支事変などが起き、日本も大変な時代を迎えはじめたことは認識されてきた。しかし学園は相変わらず平和でありそれまでのよき時代を引きついでいた。学校の中庭には大きな洋式花壇が池を中心に拡がっており北東の一隅には大温室がある。この温室が当時としては珍しく、早く中の仕事がしてみたかった。二学期になると作業は苗の移植からである。休暇前の播種は八月中の先生や園丁の丹精によりフレームの中で充

分に生育し、もう丈は三寸位に伸びている。それを竹篋で丁寧一本づつ取っては川砂、堆肥や土を入れた三寸鉢に移植するのだ。自分達で播いた種がこんなに青々育ち、それを自らの手になるあの堆肥を入れた土に植えるのは非常な感激であった。これが冬休み前にあこがれの温室に入るのだ。現在の中学教科にこんなものがあるのだろうか。あるとしてももっと慌しい化学肥料による速成栽培位ではないだろうか。作業は英、數、国漢その他の厳しい授業の間を縫って着々と進行して行つた。

十月の下旬になると一まわり成長して胡瓜に似た逞しい葉を着けたシネリヤは五寸鉢に植え換えられる。今度には前より培養土を多くし榮養を充分あたえる。土も鉢も消毒に意外なほど注意すること、日当り、気温、湿度、通気が如何に神経質に扱はれなければならないかなど体験ばかりでなくバイスケ先生の角張った柔和な顔とズーゾー辯と共に印象に残っている。十二月の冬休前にはフレームで力強く育った鉢物はよく洗い消毒されて中庭の大温室に入れられる。リヤカーに積んで裏校庭から何度も往き還りするが、やんちゃな中学生にも種を播いてこゝまで育てた喜びは生涯得難い経験に思われた。シネリヤだけでなくスキトピー、フリージャヤーの鉢も一緒である。広い低温室は青々とした苗鉢類を得て活気づいて見えた。あとの管理は先生と園丁がやってくれる。

險惡に向う世相にあつてもまだ学園には心の自由が守られており、生徒は勉強と遊びに専念できたのは思ひかえすだに幸運だった。好きな研究も放課後はほとんどさせられ、今にして見ればあの年頃が人生に如何に重要な段階であるかとつくづく考えさせられる。良し悪しに拘らず本人の内観が受けた教育の正しい評価をする。現在の青少年は老後自らを如何に内観するであろうか。我が国の教育の理念には腑に落ちない所が多い。或ひは今の方がよいのか、それにしても心配である。社会全体が人類破滅に向つて崩壊していると思はれてならない。

冬休みが終り三学期が始る。寒に入ると湘南の地でも可成り冷える。氷も平成の今よりずっと厚くはる。森蔭の川などは一寸位は氷るのでその上をわざ／＼歩いたものだ。氷がぎしぎし音を立てるのが嬉しいのであった。それだけに学校の温室は蒸気に曇つて中は春を思はせる。外から中を窺うと暮に納めた花の鉢は青々と繁茂している。こうなると一年間の丹精の仕上げが早く見たい。春待つ心と共鳴して時々授業と関係なく温室内に入れてもらったものだ。高温室の中はむっとする位暖くそこにはウツボカヅラ、サラセニヤ、ヴィーナスのハヘトリグサなどの食虫植物やデンドロビウム類、オーキッド、カトレヤ、シンビジウムなどの洋蘭、ノボタンやニンジンボク類が勢よく生育しているのを珍らしげに眺めたり、名

を覚えもした。

植物は移動が直接できないので少しの環境の変化にも弱い。温度、湿度、通気、日照が肥料、水やりや消毒にも増して大事なことをフレームや温室管理などで体得することができた。また植え合せや植物の相互位置など微妙な好き嫌があることも分った。これらの知識はその後文化文明と自然とのバランス感覚、人間と地球のエコロジー的な把握の習慣をつけてくれたことに今も感謝している。

暦も二月に入ると外の花壇の寂寥と裏腹に低温室の中はもう春爛漫と言いたい位花で賑はひ始める。フリージアの白い上向きの花の点々と並んだ花柄が一斉に筒状花をびゅ／＼と突き出し室一ぱいに甘い芳香を放っている。上段には黄や赤の巾着型の花に斑を散らしておどけたカルセオラリヤがずんぐり鉢に納まっている。ずんぐり型では三色のパンジーがもう莖ごと二つ三つつ花をつけはじめている。やさしげで可憐なのはブルーやピンク、ホワイト、イエローと色とりどりのプリムラ類である。男子と言ってもロマンチックな中学生にはこれが最も人氣が高い。はからずもこの花言葉は「少年時代の希望」だそうだ。さて我々が手塩にかけたシネリヤは葉も黒々と莖も太くたくましく中段に位置している。蕾もふくらみそめ時々花莖を少し伸ばして花辨先を綻ば

せているものもある。花びらの先端に己の色がちょぼ／＼現れる。白やピンク、紫や青などである。それを初めて見付けた時は「ああ、こんなのか。」と納得もしうれしくもあった。

この期を逸せずこれらの鉢花の頒布が例年行はれる。種類により十五銭か二十銭である。シネラリヤは美事なだけに高い方だ。その頃の放課後は生徒達が温室を訪れ銘々自作他作の好みの花鉢を求める。こんもりとブルー、ピンクの花の盛り上った鉢をぶら下げて三三伍々に駆までの中学道路を二軒程のまばらな花のパレードができるのである。当時は生徒が道草を喰はぬようこの中学専用にその道は造られていたので全校生徒が殆んど全員この道を通る。朝夕は生徒で賑やかだった。今にして思えば教育の配慮がこゝまで及んでいたのである。こんな所こそ「古き良き時代」と言はれてよい。

青いシネラリヤの花鉢を下げ得意顔で帰宅した。親にこの栽培の経緯^{いきさつ}を説明しようと意気込んでいた。ところが母は花を一目みるなり「そんな花家に持込むな。」と言う。私は一瞬啞然とした。仕方なく外を廻って自分の部屋に持ち込んで出窓の上に置き一人で花の美事な色と形を眺めていた。大豆粒の大きさのグレイの葉を中心としウルトラマリーソ色の舌状花辨が二、三層に放射形を形成して開いている。明らかな菊科の花である。これか

ら開く花蕾がいっぱい付いていてこの春が楽しめそうであるのに母親の峻拒にあった。然しその夜彼女から説明を聞いて理由がはじめてわかった。

それは大正九年のことである。二才になる長男が居た。日毎に元気に成長してゆく子を両親は希望に満ちて養育していた。所でその頃はようやく医学が地方にまで普及しはじめた所であつたが現在とはとても比べるべくもない。当時小兒病で最も恐れられていたものに赤痢、疫痢、腸チフス、ジフテリア、百日咳などがあつた。長男はその春疫痢に罹った。田舎町の医者では手に負えず、仙台の大病院に入院した。父親が病室の風情にとシネラリヤの鉢植を持って見舞つたとのこと。それから間もなく長男は病院で息を引きとつた。母の話によればそれはシネラリヤの所爲だそうだ。馬鹿らしいとは思つたがそう言うわけならば親としてはその名の花に拘るのも尤もである。

明治十三年新政府の農事会、共進会の奨励の波に乗つて洋花卉の輸入も盛に行はれていたがこのシネラリヤもその年に我が国に到来している。従つて大正九年と言えば可成りハイカラな花だったのだらう。父は当時の英文科出身なので斬新な感覚からそんな派手な洋花を病氣の子に見せて気を引き立てようといそ／＼買つて来たに違いない。この花言葉も「快活、常に喜ぶ」である。華麗

で陽気な花なのだ。その愛情は現実には裏目に出たと言う次第であった。

中学も終る頃から世は暗黒時代に入り、我が国は敗戦、米軍の占領の時代を迎える。花どころではなかったが戦後二十年も過ぎるとそろそろ経済も復興し園芸にも関心が甦ってきた。春先の花屋にはプリムラ、シネリヤ、フリージャー、スイトピーなどが甘い香りと彩りを添えはじめた。あれからは私もシネリヤを無視するようになっていた。

六年前この大学に奉職してから文学史の民族学を踏まえた研究に打ち込むことになった。イギリス文化は当然ゲルマン人とケルト人の関係から始まる。それ等民族の足跡を調べている時たまに骨壺文化と言う字にぶつかった。紀元前七百年と推定されるケルト人の遺跡がハルシュタットで一八四六年に発見されている。そこから骨壺が副葬品と共に出土した。それは遺体が火葬されたことを意味する。クルガンKurgan（高塚）文化を持っていたウラル・アルタイ系民族がインドゲルマン人と共に東方からやって来てこのザルツカンマーグートに定住し、手のかかる高塚式埋葬より合理的な火葬に変わったものと考えられている。それが骨壺方式を生み、その文化を受けたケルト人が拡散したバルト、チェコ、ポーランド東部、オーストリー、ロシア西部地方にその痕跡が残っている。その

骨壺は英語でシネラリー・アーンと言う。その納骨所はシネラリーウムである。Cinerary urn

さてこゝで昔から意識的に忌避してきたあの花の名にぶつかった。シネラリーはシネラリーと同じ綴り、従って同意語である。シネルCiner又はシニスcinisは灰を意味するラテン語である。これはこの花後に蒲公英のように灰色の毛状の種子が花托を覆うからである。あのシンデレラ姫も同義であるから彼女は新姫と言うことになる。この様に次々と語源を考えると素人エティモロジーは仲々楽しいものだ。酒席の話の種になる。閑話休題。西洋でも火葬、骨壺を連想させる名稱は縁起が悪いとして人に疎まれたらしい。病氣見舞いの花としては避けられた。日本と同じである。向うでも病院近くの花屋ではよくサイネリヤと読みかえて売られているのもこのためであろう。そこで今は学名法に従って属名は灰白色の毛髪の連想からラテン語でセネキオSenecio「老人」と変えられている。セネキオ・クルエントスSenecio cruentusつまり「血まみれの老人」だがこれかどうかと思う。花の赤い所から発想した種名である。和名では露菊、瓜葉菊、また牧野富太郎博士は富貴菊と命名された。イギリスの王族に愛されているのでこれはよい名稱と思うがどうも日本人の方が好きらしい。この花は一七七七年にスペイン領カナリー諸島Canalesからイギリスに到来し、そこで多くの改良種が作られたので彼

国で大変人気がある。花は経三、四厘のものとずっと矮小ドノミョウなものもある。紫、青、桃色、白などの花色と蛇の目模様がある。このカナリー島と言う所は犬の島の意であり生物学的に興味深い所らしい。熱帯にあるのに雪をいただく高山が聳えているのは日本の屋久島に似ているようだ。従って植物の種類も豊富でカナリーとかカナリエンスと言う学名の種が多い。本学の花壇の配色に使われている木蔭はヘデラ カナリエンスであるから多分この島生れであろう。鳥では声よしのカナリアがよく知られている。

幼い頃の因縁から少年時代そして古稀を過ぎた現在まで何となく心に引っかかっていたこの花も今その名の由来を知ると私にはかえってこの上なく懐しい思いがする。人が勝手に名付けたために好かれたり嫌われたり、花には迷惑な話だ。それに付けても人にせよ物にせよ新しく名付けると言うことはとても大事なことと思う。美しい、上品な愛らしい良い響と意味合いの名をつけるのがよい。いつも気付くのだが中国人の姓名をみると讀めないまでも女性はず判る。必ず清らかさ美しさを想像させる素晴らしい文字が付いているからである。名前は親の心をこめた賜り物なのである。

この春も花屋でこの花を見付けた。ためらうことなく青花とピンクの花を二鉢買った。一つは我が書齋に飾っ

た。ピンクの花の方はさる人にさりげなく差しあげた。

詠辞

伝え聞くところこの春お二方の本学にまたと得難い文学の学究にして麒麟の会友を見送ることになったのとこの寂しい限りである。

加藤教授は学部創設時から公私ともに心強い学の友であつた。特に学問上の御行績で学の内外に大いに寄与されたことはかつての同僚として誇らしい限りである。御退職後の自由を存分に享受されることを希求申しあげる。

上島教授には三年の間変革期の多忙にも拘らず孜孜として率先学務、学生指導にまで御盡力下さる御姿に感嘆を禁じ得なかつた。特に高邁な御見識を乞はれ御転任になることは喜ばしくもあるが残念でもある。然し何所におろうが学の道は一つ。益々の御発展と御健康を祈り上げる。